



沉之麋句
大平安民



七一人つゝをふきて居る月乃人
鶯の権か柏か数木 免く
椀け船の帆又くさむる谷の口
荒由か細く日のありや新地あり
影の梅の下水落めあり
雲めとて流して送るや筆はさる
たまたまの幕さる日つゝ鳥はあり
夜啼を鼻の先あり 故送るあり

年毎にとも捨つる人の老
と雲よるふかくれり夕の暮
原かけの梅とんまをさるる
俣火の侍子みろつる松
物子と年のあかりしるる
古寺の春もさるる梅
妻母の活めあけるる
二三人妻母のえらぬ
ふそ人のうきとるる

若もあふぬ人は海老
梨ぬと云ぬ使はるる
五月のおの雲をわくや
待りあれぬ梅よあられ
夏のあつた水村
あつた水よ人驚く
梅咲く日のはるる
キツ院秋の減るる

茶子あいの能合家あや鹿はまゝ
十人まじり海のみ久美可也
白此のや子流やある角口え
五年を添て又えまきや 菊はま

庭まじの庭うち舞く三日は月
松下木梅はけけきつ久きり
氣合ゆく茶のまはる春は花
我老をまはる思ひさうや
この後ゆるむ知を 郭 云

小紺うるまのあまの日記うや
梅散て斗れ 夕アまふ
萩のまじちり口附え盛るすや
庭の松まじ流川 給よ 梅とらり
不りくく夕暮や 鴨はま
春あやい山神はつるあまら酒
病えそても服まらり 梅まの年
年は庭くやうまきり 秋の山
給るる 女 目まけや 五葉 坂

川上して見ると、高燈籠、
形や目あそび、物も、
暮らまけて、云々、
流るる物、目も、
やうと、日言、
あふ、
曙、
おれ、
年、
毎、
減、
細、

海見ると、
是、
床、
作、
果、
川、
櫛、
月、
待、
多、
七、
日

雪のふりよこしぬ 気可なり
元日ゆいゆあま 物ゆいこし
打あさし 女の子のふし 社のまき
又あまのふし 骨あさし 汗あまの式
都もあまのふし 知あさし 木の葉あさし

地一人つ 難をて居るや 月此人
七茶を替り 獨りあまのふし 月
縮塚のふし 女あまのふし 月

三長ふしのふしあまのふし 日あまのふし
櫛替りし 若あまのふし 宿のまきあまのふし
近じやうのふし 津のふし 白
六合庵春詠摺物あまのふし
あまのふし 永と言ぬ 日あまのふし

天面あまのふし 杖あまのふし 姐あまのふし
地定むあまのふし 杖あまのふし 白
七家あまのふし 杖あまのふし 竹あまのふし

箱の窓から覗くと 葉の
十一夜や待ては宵の有る舟又夜
二階から降りのおの 牡丹多
お咲ぬま由御ふし 牡丹中
三日ついでとあつあつは階は
遠くへさかき涼き櫓のやうな
枯葉も通せんそ 浅き山
きんえさ月おたりと 夜
不足あき二款あり 春

先かけて初をよま 八
あまあくと言れなく 山
五垣越しの牡丹のそら 馬
十六夜とゆらんは 松
このえつ 月あは 子
山里、鯛うまわ 玉
鎖める吾かまそ 女
去りそは夜子入る 梅
五月のふらぬの附く 柳

茶振舞、海へ委るる、梅は丹
御降り種とよみかや、於加美美
几巾の留り、改痛、二階、水
お中の喜ハ、梅、乃花
曙の信、定、ある、を、久、良、う、如、
春の夜、も、更、て、ハ、淋、
四、内、買、乃、つ、ち、あ、じ、す、る、
門、遠、い、
老、ぬ、る、り、
登、き、つ、あ、つ、て、
秋、三、や、ら、
降、る、よ、り、
竹、叶、
鶯、の、
葉、お、こ、ぬ、れ、
十、八、夜、の、
主、は、平、
涼、

新、
五、
松、
月、
中、
だ、
裏、
中、
茎、
腋、

去と承年ハ奇ヨリ 春ハ月
森ノ影ニ如ク上極ニ登リ下ニ重
但此ノノ際六年丹事ニ其此也カ

天保八丁酉年

ハ年時梅ヨリツルヨリ如ク好シ
恒茲ヨリヨリ田リニ於テ其ノ月

去と去

天保八丁酉年

天暮キヨリヨリ如ク長ク春ハ雨
地ハ雨ノ影ハ月ヨリハ如ク好シ
人ハ此中ニカキテ麻ニ口ハ花
五婦ノ名ヨリハ如ク好シ
少事時梅ヨリツルヨリ如ク好シ
恒茲ヨリヨリ田リニ於テ其ノ月

志をいふにふ 寒くは 梅のうを
 凡中の中一はぬけて知るや夕指
 物言ぬて居るは梅のときし
 高砂の松をを巻く夕加壽の
 三見のくかどめけしきやち
 若仲の人は押をぬる良の鹿
 松下木梅のりゆはさるま
 梅絶てまじく成りぬ妻の月
 小麩うるあゆめ妻の日記のう好
 折の能くといさるいや細の梅
 床のゆわあ列のう梅のう好
 梅々をさ苗をぬるや 七 日
 松葉をかまてさくとのけしきや
 花浦危の今ぬをい どのゆ
 ふ晴を梅の春のうをあらうふ
 ちるもま向に寒きま、ろろ好
 ちちるつしきも流るも常のう
 春ふつ人のなぬら味 床ゆ々

初とついでに大車、
六分庵萬里茶山と更名披露の物
物も章一を魚子も琴谷更替曲とい
件のお山の日長と豊つり
六分庵茶尖の編抄竹紙入章

茶山

春季乱題の各勝句

催主自ら

七竹村の道もあつたわ、
五長もあつたわ、
三旅人もあつたわ、
二月十日、
茶山

待人のあるまゝあそび
陽やたやほ—あそび
樂の戸は—ぬあそび
番杖を遊ば用事か
子心や病を—
あや誰の体か
子心や世話やくし
三^書永板を—
か—

梅咲やか—
流来—
梅咲や—
日のま—
庵の—
梅咲や—
石流—
川中—

小社まら云巻をり 百千 多
順礼の髪結さし 柳さう好
教の事 淨くおの梅の末下共し
百千多 大年の松十 物 日新
葉山 雙季乱題句 合揚句 漢至身
十のそ 世や 旅立やうも 法成す
くめを 鯉のかくし 日傘の
七丈の子 丸人子 古婦 涼み
けあま なるあさし 其序

大毎八ま 妙うとあし 芥子 畑
五芍薬のこ 水又み 入かせ ぬけ
掃除し 休て 長也 岩清水
大屯のさ 巾多あり 夏の月
短の杖や かの 甘き 山 盆
手 枕の左よ 送う 新ハの ぬ
三松ウけ 入して かつあう 阿さう
あそ 洗ぬ 牡丹を
皆う 涼し 所の 橋

米搗の縄で釣きう出たる水
茶の水をわらじくし魚て其の月
あな子草あや寺や 若 若 枇
大なるの一本さるる 若 葉可那
任控らてかか 蓮ぬく庵り
壯若歌力あらそげ 又そ ぬる
き元あふ日の暮やけ 管了の
はうももあぬつふれや初松奥
若中や新子とじこる 鉄のむ

若葉くくしあつるるや 鉄の心
湖の月よあはるや 眞まあま
ふ下教ゆき晴やらの書付田共
番切歌の人は始り 白ぬあやあす水
苗垂すも言ぬ人為あて門涼
神とろ扇わらるる 雲乃 草
月山ふ 若てハふ 心蓮也
夏の月 油のみ水 心松から水
温泉の炭 席時とゆふの 夏の月

供の欲むね、^清清の系
内ゆりり力清まよりまき、山家哉
夕月おの夜々、竹々鳴る、^鶏鶏
五月おのまのり所、^都都
すへり止二の月や、若葉山
祇々、^都都
月おのり、^都都
波坂ま、^都都
若葉、^都都

右大 瀧の音あり、^集集
山一上つゆ、^都都
雲の半、^都都
心やふ、^都都
まや其と、^思思

御爲
有
危
大
四

こ古
神
林
松
呼
凡

か
あ
本
あ
あ
主
あ

美の心まよはぬ想あふ 葉の影

きりぎりすのうそとていふこころのうそ
よ ねがふてあはれなるまのこころなる

り月次 月天田春庵筆

七 両あつゝいふまゝにちあゝのちホのち
子 長あつゝいふまゝにちあゝのち
三 子あつゝいふまゝにちあゝのち

おれおれおれおれ

おれおれおれおれ
おれおれおれおれ

芝田 梅堂

孔聖 空母 正凡

〇

其流 富傳

坊田 文乃大

地量

ナリ

川本 河

左東

水原

里之 之

林曹

大坂

比之 祇

貸僕

京

村 上

河野

尾伝

井柳 西

文翠

五下

大新 木

乙人

不

水 改

馬

産

〇

上

心

事

日

一 概 江戸 町 大和 必 江 戸

ち 大 町 江 戸 必 江 戸

了 知

江戸 町 大和 必 江 戸

江戸 町 大和 必 江 戸

裁 裁

江戸 町 大和 必 江 戸

江戸 町 大和 必 江 戸

手 出

江戸 町 大和 必 江 戸

江戸 町 大和 必 江 戸

風 風

江戸 町 大和 必 江 戸

江戸 町 大和 必 江 戸

茅 丸

江戸 町 大和 必 江 戸

江戸 町 大和 必 江 戸

京 京

江戸 町 大和 必 江 戸

江戸 町 大和 必 江 戸

京 京

江戸 町 大和 必 江 戸

江戸 町 大和 必 江 戸

寅の年尾

あつ又

うねーのほ子供いや年の号
卯の卯美



六道

あうれー 誰よむわあ の 君の 壽

